

マサイの「時計」とTimeの尻尾

■登録の行政事務

前回は、中林伸浩の論文〔「名前と氏族」、山野和男・森謙二（編）『名前と社会』、1999〕を引用して、西南ケニアのイスハ人の中では身分証明書による事実上の国家統制の結果、個人は「クリスチャン名」と祖名を一つずつもつという、意識の標準化が進んでいると述べた。

ただし、*Law of Kenya*第107章、個人登録条例（Registration of Persons）は個人名の登録の仕方の細部を具体的に規定していない。だから、イスハにおける定式化は、行政的な運用上の裁量、しかも民族的なバイアスのかかった裁量によるものだと考えなければならない。

現在、身分証明書を申請するには、国家登記局が作成した簡便な申し込み用紙（2nd Generation Identity Cards Replacement Information Sheet）に17の必要事項を記入して提出しなければならない。それらは、①フルネーム、②父親のフルネーム、③母親のフルネーム、④〔本人の〕誕生年月日、⑤性、⑥出生地（県名）、⑦部族（tribe）、⑧氏族（clan）、⑨家族（Family/*Mlango*）、⑩現在地（県名）、⑪その亜県（Division）、⑫（国会議員の）選挙区、⑬（現在地の）郡（Location）、⑭（同）亜郡（Sub-location）、⑮村または農園（Village/*Kijiji*, Estate）、⑯（郵便の）住所、⑰職業である。この内⑨は、そのスワヒリ語表記が*Mlango*となっているので、（最小）リネージに該当する単位のことだと思われる。

申し込み用紙のタイトルからは、個人名の登録をある程度まで一元化したいという国家の意図が読み取れる。しかし、例えばフルネームが何を意味するのかという補足説明は、申請用紙には全く記されていない。受け付け係官の裁量の幅が大きい状況が容易に推測されよう。

■キプシギス事情

そこで、この節では、私の調査地であるボメット県ンダナイ亜県の実情を眺めてみよう。

ンダナイの亜県令事務所には、4人の登記官が常駐している。その総てがキプシギス人。1人は地元ンダナイ郡の出身だが、全員が統一した運用方針を採っている。それをほぼ次の4点に纏めることができる。(1) 幾つの名前を、(2) どんな順番で登録してもいい。ただし、(3) 父称 (*kainetap kwan*) を示す尊称である *arap* は省略する。(4) 幼名は、粥名 (*kainetap musarek*) の内でも、誕生時刻を指示する「誕生時間名」 (*kainetap saait*) だけに限定する。

このような運用の根拠については、上部からの指示だというばかりで、係官の誰もがうまく説明できなかった。ただ、(3) ついては、国家統制という視点から推定する事が出来そうだ。

(3) は、表記の簡潔化よりも、民族性を登録名から排除する措置であろう — 表記の簡潔性は、名前の数を制限しない (1) と矛盾する。その背景として、*arap* という語が、ケニアの第2代目で現職の大統領である Daniel arap Moi の出身民族（群）としてのカレンジンの象徴のように見られている事実を指摘できよう。

ここで思い出すのが、1980年代初め、サッカー・クラブが民族性を表す名称を用いる事が禁じられた事実である。一例を挙げれば、(バ)ルイア人のチームで人気と実力を兼ね備えていた Abaluhya Football Club (AFC) Leopard は、この措置によって、African Football Club (AFC) Leopard と改名したのだった。

ただし、カレンジン群でも北のマラクウェット人は、*arap* ではなく *wero* を用いる。すると、*arap* を省く事は、国民の一体性ばかりでなく、反面ではカレンジンの一体性を高める効果も狙

った措置であるのかも知れない。

■キプシギスの幼名

登録できる幼名を「誕生時間名」に限るという(4)の方針は、一見不可解に思える。そこで、まずキプシギスの幼名を詳しく紹介しよう。一便宜上、原則として男性名のみを挙げる。

幼名の主要なジャンルである粥名には、「誕生時間名」以外に、誕生の場所を示すものや誕生の他の状況を示すものなど、諸々の変異がある。「誕生時間名」には、例えば、Kiplang'at (夕方)、Kibet (昼下がり)、Kipkoechi (明け方)、Cheruiyot (深更)、Kiprono (牛群が放牧から帰って来る時)、Chelimo (朝の耕作の時；ただし女性名)がある。もっとも、これ以外の或る状況的な時点を示す、Kipsere (ビールが醸し上がった時)、Kiptoo (来客中)、Kipruto (母親の外出中)、Kipkoros (イニシエートが聖なる*korosyot*灌木を儀礼用に持ち帰った時)、Kipmaina (Maina年齢組の形成中)などの名前は、「誕生時間名」には分類されていない。

また、生まれた場所を示す粥名には、Kibii (軒下の露地)、Kipkurgat (戸口)、Kimabwa (祭壇)などがある。さらに、Kiptanui (危うく死にかけた)、Kipterer (砂を鼻孔に注ぎこまれてやっと呼吸をした)、Kipchilchil (女たちが大童だった)、Tele (母胎に長く止まった)など、誕生時の状況を叙述する名前も数多い。加えて、この他の幼名には「印付きの者」であることを示す様々な名前や、長子や末子であることを示す名前、自分に再来した祖霊を暗示する名前などもあって、多彩である。

■国家の時間、民族の時間

では、なぜ「誕生時間名」だけが登録上有効なのか。この疑問もまた国家統制という視点から合理的に読み解く事ができそうだ。というのも、度量衡の統一と統制は国家統合の最も効果的な手段となる。中でも、時間と空間の統一が「幻想の共同体」を経験する基盤なのである。

とはいえ、時間の概念は様々である。社会人類学者E. エヴァンズ=プリチャードが、南スーダンのヌエル人の時間意識では、物理的な環境に支配される「生態的時間」が基礎となり、民族社会の構造化の論理を反映した「構造的な時間」がそれと干渉し合っている事を明らかにした。また、ヌエル人が英語のtimeに相当する抽象的な表現法を持たず、それに合わせて自分の行動を順序立てない事も報告している [Evans-Pritchard, E. E., *The Nuer*, 1940]。

キプシギスの時間も同様だ。円環型年齢組による構造的な時間を示すKipmainaとか、牛時間や農耕時間という生態的時間を示すKipronoやChelimoのような幼名はもちろん、一日の大まかな時刻を示すKipkoechiやCheruiyotなども、単線的に等速で進行し続け、且つ等分できる西欧近代の抽象的なtimeの観念からは縁遠い。それでも、「国民国家」ケニアは諸民族の時間意識に構造的な相同性を見て、それを近代国家の時間意識であるtimeに重ね合わせようとしているのだといえよう。だから、誕生の時点を叙述する名前の内から一日の時刻を指すものを特定して「誕生時間名」という新たな名称を作りだし、それらに冠したのである。

■マサイ人のビーズ時計

これは、必ずしも国家の側にだけ見られる意識ではない。すぐに思い浮かぶのは、欧米人が往々近代文明に超然とした「高貴な野蛮人」として神話化してきた牛牧の民、マサイの人々である。ビーズ細工に優れた彼らは、植民地化後のかなり早い時期から、美しく模したビーズの腕時計を手首に巻いていた。そして、それは彼らの近隣の民族であるキプシギスやルオ、あるいはギクユやルイアなどの人々からも望まれ、やがて欧米人向けの恰好の土産物にもなった。

半ば国家経済の外側にいて、それゆえに尊敬され、神話化されたマサイ人であっても、どこかで国家の尻尾を捕まえておきたかった。その尻尾が「腕時計」で表象したtimeだったのだ。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)